

<基調講演>

田村 学 先生 文部科学省初等中等教育局 教科調査官

「飼育活動が育てる子どもの心」

講演要旨：学校における動物飼育では様々な成果が期待できる。命を実感したり、生き物に親しみをもったり、責任感や協同性が育まれたりする。飼育する動物だけではなく周囲の友達への思いやりの気持ちが育ったり、自分自身に対する自尊感情も高まったりする。こうした飼育活動の教育的価値を確認するとともに、そのような成果を上げるためには飼育活動がどうあればよいのか、どのような教育活動として展開していくことが大切なのかを考えていく場としたい。

<口頭発表>

(1)「赤松小学校での生活科におけるモルモット飼育の実践」

鹿島正史 恩地澄子 増田美和（東京都大田区立赤松小学校教諭）

本校の特色として、低学年の生活科ではモルモットの飼育活動を実践している。この飼育活動は、毎年1年の前半を2年生がモルモットの世話をし、それを後半で1年生に引き継ぐという異学年の交流も兼ねており、これは、本校に深く根ざした教育を代々引き継ぎ、一貫した実践を行うという、本校の教育の基盤として大きな役割を担っている。

モルモットの飼育を通して、子どもたちは生き物への親しみを持ち、生命の大切さを学ぶだけでなく、知的好奇心を持ちながら様々な気付きを通して問題解決に取り組んだり、自分自身の成長に気付いたりすることができると考えている。

(2)「小動物とのふれ合いで育む豊かな心ーふれあいストリートの活動を通してー」

市尾公子（東京都小平市立小平第六小学校 教諭 飼育委員会）

小平第六小学校では、動物たちとのふれ合いをよりいっそう増やすため、職員室廊下にモルモットとウサギの小屋を設置した。その廊下を飼育委員会で「ふれあいストリート」と名付け、そこで動物たちとふれあう「ふれあいたい」活動を行った。

その結果、いつでも児童が動物と接することができるようになった。休み時間、掃除の時、放課後など……。児童だけでなく、保護者、来校者そして教職員など多くの人が動物とふれ合い癒されている。また、動物たちもすっかり人間に慣れ学校の人気者になっている。動物達は風雨にさらされることもなく、体長の変化にも多くの人がすぐ気づくようになった。

「ふれあいストリート」の活動は、子ども達にも動物達にもそして大人にも癒しと豊かな心をもたらしてくれる。

(3) 「不登校児がモルモット飼育の機会を得て」

芳倉優富子 (奈良県香芝市立下田小学校 教諭 LD・ADHD 等通級指導教室)

三本隆行 (帝塚山大学心理学部心理学科 非常勤講師 (社) 奈良県獣医師会)

小学3年生が始まって一週間後に登校しぶりが出始め、教室に登校できなくなり、保健室登校となった母子分離不安を持つ児童に対して11月からモルモット飼育の機会を得た。

10月には、家を出ることができるものの学校が近づいて来ると足が止まってしまう学校内に入ることができない日が多くなってきた。母親は、じっと立ち止まる本児を残して仕事に向かう事もあったが、本児の様子から仕事の量を減らし母子登校をしていた。母子登校であっても立ち止まり学校に入れなくなった本児に、モルモットの飼育を通して学校での居場所、心の安定の場所、自分の役割の確認をしながら登校できる日が増えてきた。現在、少しずつ通常学級教室に入れるようになってきている。

(4) 「‘チョコとマシュとぼくわたしの友だち’物語

～教室内飼育活動を軸とした学びの広がりや深まり～

加藤直子 (横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校 教諭 生活科)

「今日はおばあちゃんのたんじょう日でした。お母さんのお母さんです。わたしのお母さんはママです。チョコとマシュのお母さんは今どんな気もちかなあ、と思いました。さみしい気もちかな、と思いました。」

育てているモルモットのみならず、その親へ思いをはせているこの日記から、生きものに対する心情の豊かさを感じずにはいられない。

1年生2年生と2年間、モルモットのチョコとマシュを教室で飼育し、生活科という教科において、子どもたちの学びを創り出してきた。継続して飼育するからこそその学びであると考え。しかし、継続して飼育をしているからといって自然と学びが生まれるわけでもない。モルモットへの愛着を高めていけるような手立てを考え実践し、子どもたちとモルモットとの関わりにストーリー性を持たせていく。そこから生まれた子どもたちの姿を伝えることができると願っている。